

(4) シクラメン

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
軟腐病 (細菌)	①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。 ②移植・灌水などの管理作業で植物体に傷を付けないように注意する。 ③灌水は過湿にならないように注意する。 ④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。 ⑤被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。 【参考事項】 梅雨明け前後から8月にかけて発生する。 灌水に使用する水にも注意が必要である。 宿主範囲 (ナス科、アブラナ科、キク科、ユリ科、セリ科など) は極めて広い。	①茎葉部のみでなく、球根にも十分かかるように農薬を散布する。 (例) ストレプトマイシン・有機銅水和剤 (ドーマイシン水和剤) 非病原性エルビニア カロトボーラ水和剤 (バイオキパー水和剤) (発病前～発病初期)
葉腐細菌病 (細菌)	①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。 ②移植・灌水などの管理作業で植物体に傷を付けないように注意する。 ③高温・過乾・過湿・多肥にならないように注意する。 ④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。 ⑤被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。 【参考事項】 夏季に発生が多く、この時の植替え作業は本病を誘発する。 病原菌は土壌伝染及び種子伝染、二次的には灌水による飛沫や接触により伝染する。	①鉢上げ時、葉組み時、鉢替え時などに、予防的に農薬を灌注、散布又は土壌混和する。 (例) 有機銅水和剤 (キノンドー水和剤 40・キノンドー水和剤 80・キノンドーフロアブル) (発病初期) 有機銅粒剤 (キノンドー粒剤) (鉢上げ時または鉢替え時)
萎凋病 (<i>Fusarium</i>)	①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。 ②被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。 ③高温多湿を避ける。 ④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。 【参考事項】 本病により腐敗・乾固した株には、白色綿毛状のカビが見られる。この株を放置すると、ここから灌水の水しぶきや風などにより分生子が飛散し、二次伝染をおこす。 鉢上げ時にできる根の傷口から感染が起こりやすい。	①発病初期から農薬を灌注する。 (例) ベノミル水和剤 (ベンレート水和剤)
灰色かび病 (<i>Botrytis</i>)	①通風・換気などにより施設内の湿度を下げる。 ②枯葉や咲き終わった花をこまめに除去する。 【参考事項】 梅雨時期や秋の施設を密閉し始めた時期 (多湿、結露が発生しやすい) に発生する。 軟弱徒長している場合に多発しやすい。 宿主範囲が広く、空気伝染するため、他の罹病作物が伝染源となることもある。	①常発ほ場では農薬で予防散布を行う。 (例) バチルス ズブチリス水和剤 (ボトキラー水和剤) (ダクト内投入) (発病前～発病初期) (花き類・観葉植物) DBEDC 乳剤 (サンヨール) (発生初期) (花き類・観葉植物) ②発生初期に農薬を散布する。 (例) フルジオキシニル水和剤 (セイビアーフロアブル 20) (発病前～発病初期) (花き類・観葉植物) ペンチオピラド水和剤 (アフエットフロアブル) (発病初期) (花き類・観葉植物)
炭疽病 (<i>Colletotrichum</i>)	①発病株は早期に除去し、適切に処分する。葉かきなどにより除去された枯葉は、直ちに施設外に持ち出し、適切に処分する。 ②高温、多湿にならないよう盛夏期の遮光や換気を行う。 ③地上部への灌水の水はねにより感染するので、発生施設では底面灌水に切りかえる。 【参考事項】 発病適温は 23～28℃で多湿時に多発する。 農薬の薬効が現れると病斑が乾固して病勢が停止するが、高温多湿条件になると再び発病するので、病斑部や病株は除去する。	①発病初期から農薬を散布する。 (例) ペフラゾエート乳剤 (ヘルシード乳剤 (施設栽培)) マンゼブ水和剤 (ジマンダイセン水和剤) 有機銅水和剤 (キノンドーフロアブル、オキシンドー水和剤 80)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
ミカンキイ ロアザミウ マ	<p>①施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットや0.8mm目合いの赤色系ネットを張り、侵入を防止する。</p> <p>②不必要な花及びほ場内の雑草は本種の発生源となるので、速やかに処分する。</p> <p>③周辺の雑草にも寄生するので、除草する。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。</p> <p>(例)</p> <p>トルフェンピラド・メタフルミゾン水和剤（アクセルキングフロアブル）（花き類・観葉植物）</p> <p>エマメクチン安息香酸塩乳剤（アフーム乳剤）（花き類・観葉植物）（以上、アザミウマ類）</p> <p>カルタップ水溶剤（パダンSG水溶剤）</p> <p>クロルフェナピル水和剤（コテツフロアブル）（花き類・観葉植物）</p> <p>チアメトキサム水溶剤（アクタラ顆粒水溶剤）（花き類・観葉植物）</p>
	<p>【参考事項】</p> <p>生育の早い花や施設開口部付近の花での被害に注意する。</p> <p>可能ならば、夏期に一度施設内の植物（雑草を含む）を除去し、施設を2週間程度密閉し、害虫を蒸し殺すことも効果的である。</p>	
ハスモンヨ トウ	<p>①施設の開口部に目合い4mm程度の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。</p> <p>②孵化直後の幼虫は集団で加害しているため、捕殺の効果が低い。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。</p> <p>(例)</p> <p>エマメクチン安息香酸塩乳剤（アフーム乳剤）</p> <p>クロルフェナピル水和剤（コテツフロアブル）（以上、ヨトウムシ類）</p> <p>フルベンジアミド水和剤（フェニックス顆粒水和剤）</p> <p>ルフェヌロン乳剤（マッチ乳剤）</p> <p>ピリダリル水和剤（プレオフロアブル）（以上、花き類・観葉植物）</p>
	<p>【参考事項】</p> <p>多発するのは7～11月頃である。</p> <p>若齢幼虫は、葉裏から集団で表皮を残して食害するため、白い食害部が目立つ。</p> <p>中老齢幼虫は株間にもぐり、若いつぼみや葉を食害する。</p>	
シクラメン ホコリダニ	<p>①施設間の株移動には注意する。また、セントポーリア、デルフィニウムなどを同じ施設に持ち込まない。</p> <p>②施設近隣の作物（イチゴ、ピーマン、トウガラシなど）から移らないように注意する。</p> <p>③施設周辺の除草を行う。</p> <p>④被害株をほ場外に持ち出し、適切に処分する。</p>	登録農薬はない。
	<p>【参考事項】</p> <p>他の寄生するホコリダニ類として、チャノホコリダニが確認されている。</p> <p>シクラメンホコリダニによる被害程度は、チャノホコリダニによる寄生に比べて大きい。</p> <p>初発時の肉眼による発見は困難で、春の幼苗期や9～10月の開花始めに、花や新葉の奇形、変色で気づくことが多い。</p>	